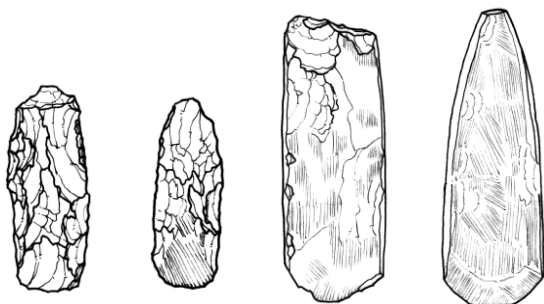


盛岡市遺跡の学び館所蔵考古資料図録Ⅱ

ー盛岡市川目A遺跡・沢田遺跡出土磨製石斧図集ー

キーワード 盛岡市 縄文時代 小型磨製石斧 ネフライト

神原 雄一郎・飯塚 義之
樋下 理沙・小野 章太郎



例 言

- 1 本資料集は、盛岡市遺跡の学び館第20回企画展「盛岡の縄文文化―縄文人の石細工―」の図録未掲載資料及び実測図を「図集」として公開するものである。本図集では「川目^{かわめ}A遺跡」・「沢田^{さわだ}遺跡」より出土した磨製石斧を紹介する。紹介する資料は遺跡の学び館で保管する資料を掲載した（寄贈・未報告資料を含む）。

寄贈資料は、平成17年1月22日付で盛岡市に寄贈された奥健夫氏採集資料（以下 奥資料）、平成28年3月15日付で盛岡市に寄贈された古澤典夫氏採集資料（以下 古澤資料）、令和3年12月3日付で盛岡市に寄贈された武田良夫氏採集資料（以下 武田資料）を中心とした。

- 2 本資料集に掲載される石器の出土遺跡は次のとおりで、()内は当館で使用している略称である。
- ・川目A遺跡（YKA）
 - ・沢田遺跡（YSD）

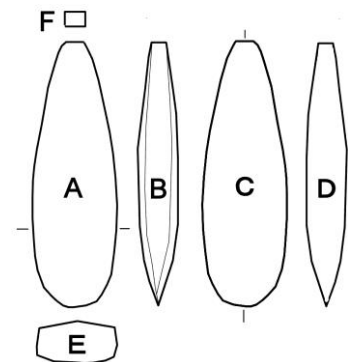
- 3 本図集は遺物の実測図・写真による資料の呈示を意図して作成した。

- 4 図化にあたり、スケールは1:2で統一している。図版には説明を補うため計測表を付した。

- 5 本図録にかかる資料整理は盛岡市遺跡の学び館 神原雄一郎・樋下理沙、化学分析による石材同定は中央研究院地球科学研究所（台北） 飯塚義之、石器の検証は神原・小野・樋下が行い、神原・樋下が編集した。調査には、日本学術振興会科研費（基盤研究C：21K00987）を一部運用した（飯塚）。

- 6 図示した遺物実測図は右図のようにアルファベットの各面に付し、説明内容に応じてA・B…面と呼称する。

- 7 本稿では便宜的に長さ6cm・最大幅3cm未満の石斧を小型。長さ6cm以上12cm未満、最大幅3cm以上6cm未満を中型。長さ12cm以上、最大幅6cm以上を大型とした。



- 8 本稿を作成するにあたり各機関・各位に御指導・御協力を頂いた。記して謝意を申し上げる。相原淳一、市川健夫、イローナ・パウシュ、榎本剛治、小野亜矢、小保内裕之、金子昭彦、菅野智則、木ノ内瞭、北村忠昭、小林謙一、菅原哲文、鈴木雅、高木晃、立田理、名久井文明、西野修、根岸洋、花海義人、福田正宏、森先一貴、八木勝枝、吉田泰幸（所属先、敬称略）

I 経 過

1 はじめに

盛岡市には789箇所にあつた遺跡（埋蔵文化財）が所在し、その内460遺跡から縄文時代の遺構・遺物が確認されている。盛岡市東部、南北に連なる北上山地から西流する築川流域には数多くの縄文遺跡が確認されており、下流域に位置する川目遺跡（川目A遺跡）と沢田遺跡は、古くから多量の土器や石器が出土する遺跡として知られた遺跡であつた（1958 盛岡市史 第1巻）。昭和20年代以降、奥健夫氏・古澤典夫氏・武田良夫氏による川目A遺跡・沢田遺跡の丹念な踏査が行われ、縄文時代後期から晩期にかけての遺物が数多く採集された。その多くが未報告資料であるため、今回は「蛇紋岩製小型磨製石斧」とされていた資料を、実測図化して紹介するものである。資料報告に際し、可搬型蛍光X線分析装置（以下、「 p -XRF」とする）法による非破壊化学組成分析を行い、また p -XRF 分析によって選別した資料について低真空走査型電子顕微鏡（SEM）による表面観察とエネルギー分散型X線スペクトルメーター（EDS）を用いた非破壊化学分析を実施し、さらにこの SEM-EDS 法による定量分析結果を元に p -XRF 法による分析値の評価を行った。一連の石材分析を通して、これまで「蛇紋岩」とされてきた石材の多くがネフライト、いわゆる軟玉であることが化学的に明らかにされたのでここに報告する。

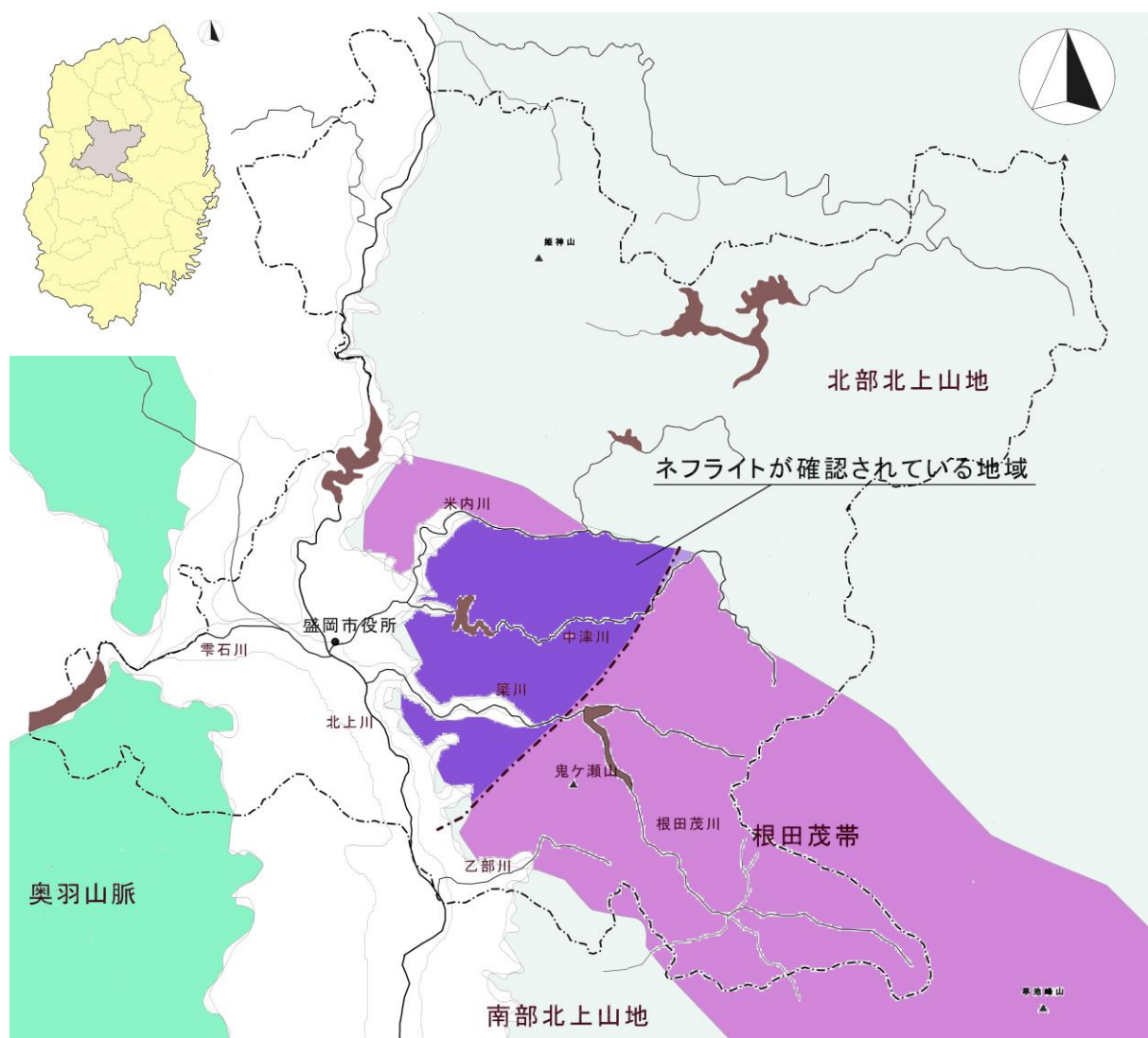
2 北上山地－根田茂帯に産出するネフライト

（1）根田茂帯の岩相 盛岡の縄文時代遺跡から出土するネフライト製磨製石斧・石製品の石材の産地について、盛岡市東部を南北に延びる根田茂帯（旧早池峰構造帯）の変成岩体に産する緻密な透・緑閃石からなるネフライトの可能性が確認されたのは最近のことである。透緑閃石については、以前よりトレモラ閃石（大貫他 1967）、アクチノ閃石（大上他 1983、大貫他 1988）・（内野他 2008）が当地域の変成岩に含まれると報告されており、大上は盛岡市砂子沢長野峠で見られる角閃岩について、「角閃岩は中～粗粒結晶で、弱い片理構造を示す部分も存在する。淡褐色～褐色角閃石（一部アクチノ閃石化している）を主とし…」と根田茂帯におけるアクチノ閃石（緑閃石）の在り方を明示し、更に当地域に分布する蛇紋岩と他の変成岩接触部に滑石が生成されていることも述べた。内野は「変玄武岩類の変成度については両ユニット（根田茂帯 綱取ユニット・滝ノ沢ユニット）でパンペリー石－アクチノ閃石相～緑色片岩相を示す」と報告し、根田茂帯にはトレモラ閃石（透閃石）・アクチノ閃石（緑閃石）が存在することを確認していた。

（2）北上（早池峰）産透閃石 川目A遺跡（第4・5次）の調査担当者である須原は、未成品を含めて1,363点にあつた磨製石斧の石材の多くが北上帯（早池峰山周辺）由来の蛇紋岩とし、遺跡に接して流れる築川と早池峰山麓に水源を持つ築川支流、根田茂川に石材の来源を推測（須原 2013）。その後、中村由克によって磨製石斧石材の再検証が行われ（中村 2017）、蛇紋岩製とされていた磨製石斧に透閃石岩製磨製石斧が含まれていることに注目し、石材産地として早池峰山周辺・遠野市宮守周辺・奥州市母体など大規模な蛇紋岩体が分布する地域を記し、早池峰産透閃石岩を用いた製品が青森県まで流通することを指摘する。しかし、「北上（早池峰）産透閃石岩」とされた岩石は出土遺物の石

材のみであり、原岩産地が未確認、原岩の岩石学・鉱物学的な記載・化学分析値が存在しなかったことから、供給源を見据えた地質学的な調査が必要とされた（飯塚・小野 2021）。

(3) 盛岡東部産ネフライト 上記の問題を踏まえ、令和 3 年、神原・樋下・小野・菅野は早池峰山を含む母体変成岩帯・根田茂帯と北部北上帯が接する地域を踏査し、ネフライトの確認を試みた。採取された試料は飯塚により化学分析が行われ、盛岡市東部を流れる中津川流域より採取された岩石にネフライトと思われる岩石が含まれることが確認される。令和 4 年 8 月に飯塚・神原・小野・樋下による中津川流域の踏査を行い、3 地点でネフライトを含む岩体、後に 2 地点が追加され、結果的に中津川流域で 5 地点の露頭が確認される（飯塚他 2023）。中津川流域のネフライトは、滑石・緑泥石を含むネフライトを主体的に産出する岩体、緑簾石を多く含むネフライトを主体的に産出する岩体に 2 大別されることが明らかになり、川目 A 遺跡、沢田遺跡を始めとした市内各地から出土するネフライト製品と原石の比較研究・観察する上で重要な情報が得られることになった



盛岡の地帯構造概観図

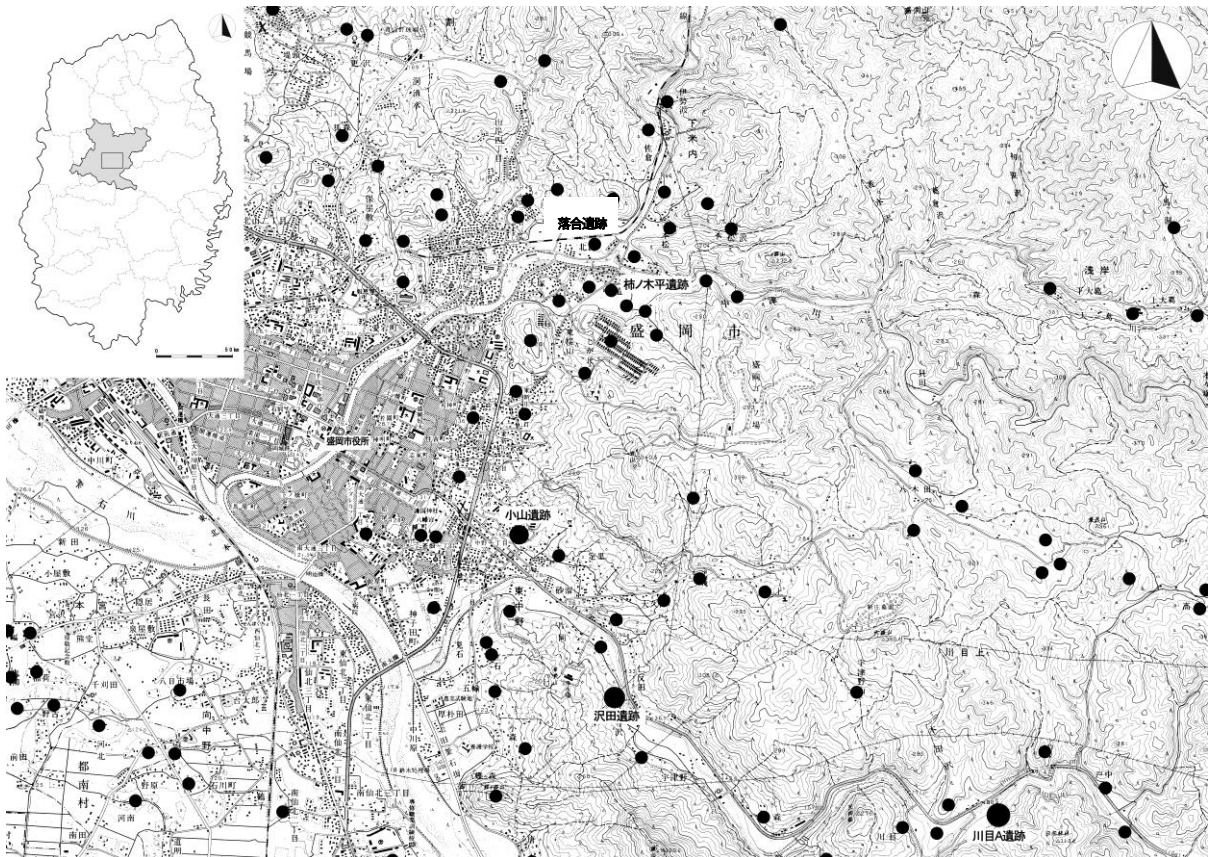
1 : 200,000

Ⅱ 川目A・沢田遺跡出土磨製石斧

1 川目A遺跡の概要

川目A遺跡は古くから縄文時代の土器や石器が出土することで有名な遺跡で、地元のみならず遠方からも、地表面に散布する遺物を採集するために人々が訪ねる遺跡であった。採集された多くの資料は散在したが、当館に寄贈された奥資料、古澤資料、武田資料には数多くの剥片石器と磨製石器が見られ、特にネフライト製小型磨製石斧、石製品が目を引く。また、個人蔵だがヒスイ製の鯉節形大珠が1点採集されている。

遺跡の位置 盛岡市東部から西流し、北上川と合流する「^{やながわ}築川」流域に所在する。川目A遺跡は過去において「川目遺跡」と称され、昭和55年以降に川目A・B遺跡、平成4年に川目C・D遺跡が追加され現在に至る。川目A遺跡南辺は、小起伏山地が迫り、山地の縁辺は築川により浸食されて急崖となる。遺跡は急崖下に形成された築川の流路に沿う狭い砂礫段丘上に位置し、これまでの発掘調査で縄文時代早期から晩期、中・近世に至る遺構・遺物が発見されている。また、日本考古学協会会員 武田良夫氏によって続縄文時代の後北C₂式土器が採集されている。



第1図 川目A遺跡・沢田遺跡の位置

1 : 50,000

第1～3次 調査の歴史は古く、昭和 10 年代に小田島禄郎によって調査が行われ、その際出土した遺物の一部が川目小学校に保管されている。昭和 28・30・31 年の 3 回にわたり岩手大学学芸学部、旧築川村教育委員会（昭和 30 年 盛岡市に合併）、盛岡市教育委員会による共同発掘調査が岩手大学 草間俊一教授を中心に実施された。調査では縄文時代中期後葉から晩期前葉にかけての遺構・遺物が発見され、特に後期から晩期にかけての遺物が主体的であったと報告されている（1958 盛岡市史 第 1 巻）。草間は市史の中で「小形の短冊形とも云うべき蛇紋岩の石斧が後期の土器と伴出している。」と注意している。

第4次 第4次調査は浄水施設建設に伴う事前調査で、平成 12 年に盛岡市教育委員会が実施した。調査では縄文時代中期後葉の竪穴建物跡と土器・石器、後期から晩期にかけての配石遺構と土坑、多量の土器・石器が出土した。調査では縄文時代晩期中葉（大洞C₂式）が主体的に出土しており、特筆されるのは晩期の土坑内からヒスイ製勾玉 2 点、丸玉が 7 点一括した状態で出土したことである。

第5・6次 第5・6次調査は、国道 106 号都南川目道路改築工事に伴う緊急発掘調査で、第5次調査は平成 18～21 年、第6次調査は平成 19 年に岩手埋文が調査を実施した。第5次調査区は第1～3・4次調査区と同じ低位段丘面上で第6次調査区は低位砂礫段丘面より高位の小起伏山地縁辺部に位置する。

第5・6次調査では、縄文時代後期から晩期にかけての遺構・遺物を中心に縄文時代各期の遺構・遺物が確認されている。今回の磨製石斧の紹介に関連させると、未成品、欠損品、完成品等の「磨製石斧」が総数 1,349 点出土している。報告者の一人である須原は、「同遺跡あるいは周辺で磨製石斧が生産される理由として、磨製石斧の素材石材となる蛇紋岩等が隣接する根田茂川周辺で豊富に採取できる点がある」と述べ、石材産地を控えた優位性、製作工程を検討し、膨大な未成品がありながら完成品が少量なのは、完成品を遠方に流通させていたことによるとした（須原 2013）。

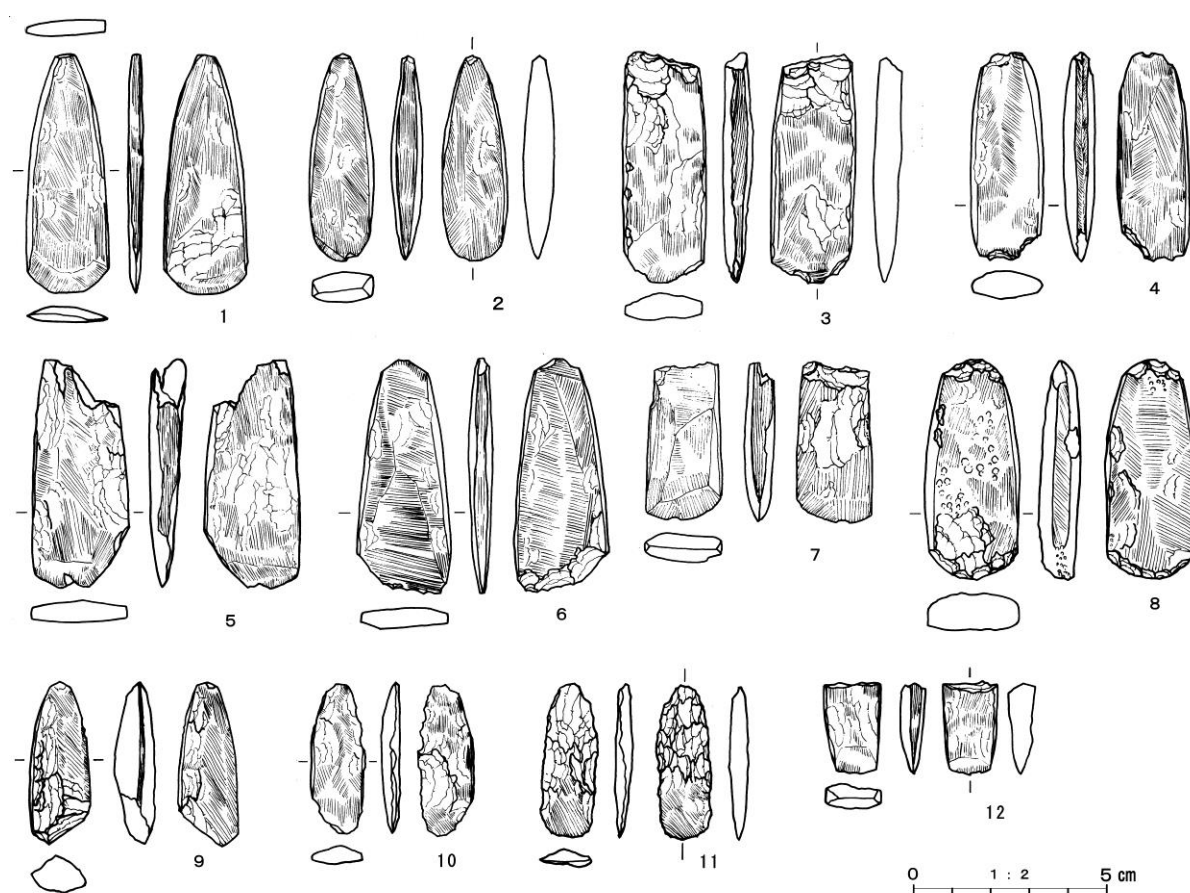
石斧製作遺跡 遺跡の学び館が保管する川目 A 遺跡・沢田遺跡出土の磨製石斧は完成品・未成品合わせて 141 点を数える。前述した岩手埋文による調査で出土した 1,349 点と合わせると現在までに 1,490 点に及ぶ磨製石斧が出土したことになる。その量と製作工程を示す未成品の数から、須原の見解通り石斧製作を行っていたムラと考えることに異論はないであろう。

川目遺跡より採集された遺物は膨大で、特に石器類が多い。採集された石器は石鏃や石匙、磨製石斧などの完成品が主体的で、奥・古澤両氏によって採集された磨製石斧について、盛岡市史では「石器の中で注目すべきものは小形の石斧や石棒の存在…」、「…実用のものとは考えられない程精巧な小形の石斧…」など、伐採・切断といった力強さを想像する石斧とは異なる特性を持つ石斧として紹介した。

今回紹介する小型磨製石斧は、前述した盛岡市史に掲載された奥資料を中心に、古澤・武田各氏による表面採集資料、旧川目小学校保管資料、盛岡市教育委員会による第3次調査出土資料（未報告分）より製作過程を知る上で重要と思われた資料を実測図化するものである。

磨製石斧（第2図1～第6図43）

短冊形を呈する磨製石斧 1～12は盛岡市史において「短冊形」とされ、刃部の平面形状が円刃状を呈し、刃部の断面形状が両刃の小型磨製石斧である。これらの小型磨製石斧刃部には研磨痕なのか使用痕なのか判別のつかない条線が刃部先端に残されている。先端部の剥離痕を観察しても使用による衝撃によるのか、刃部形成時の剥離痕（薄い部分の割れ）なのか判別はつかなかった。しかし、1・2を観察する限り、頻繁に使用された痕跡は見られず、実用的な石斧ではないように思われた。なお、小型磨製石斧に用いられたネフライトには、軟質の緑泥石（chlorite）が流体のように結晶粒界に充填されているものが多く、衝撃に対して節理面で分割される可能性が高いことから非実用的な石斧と思われる。



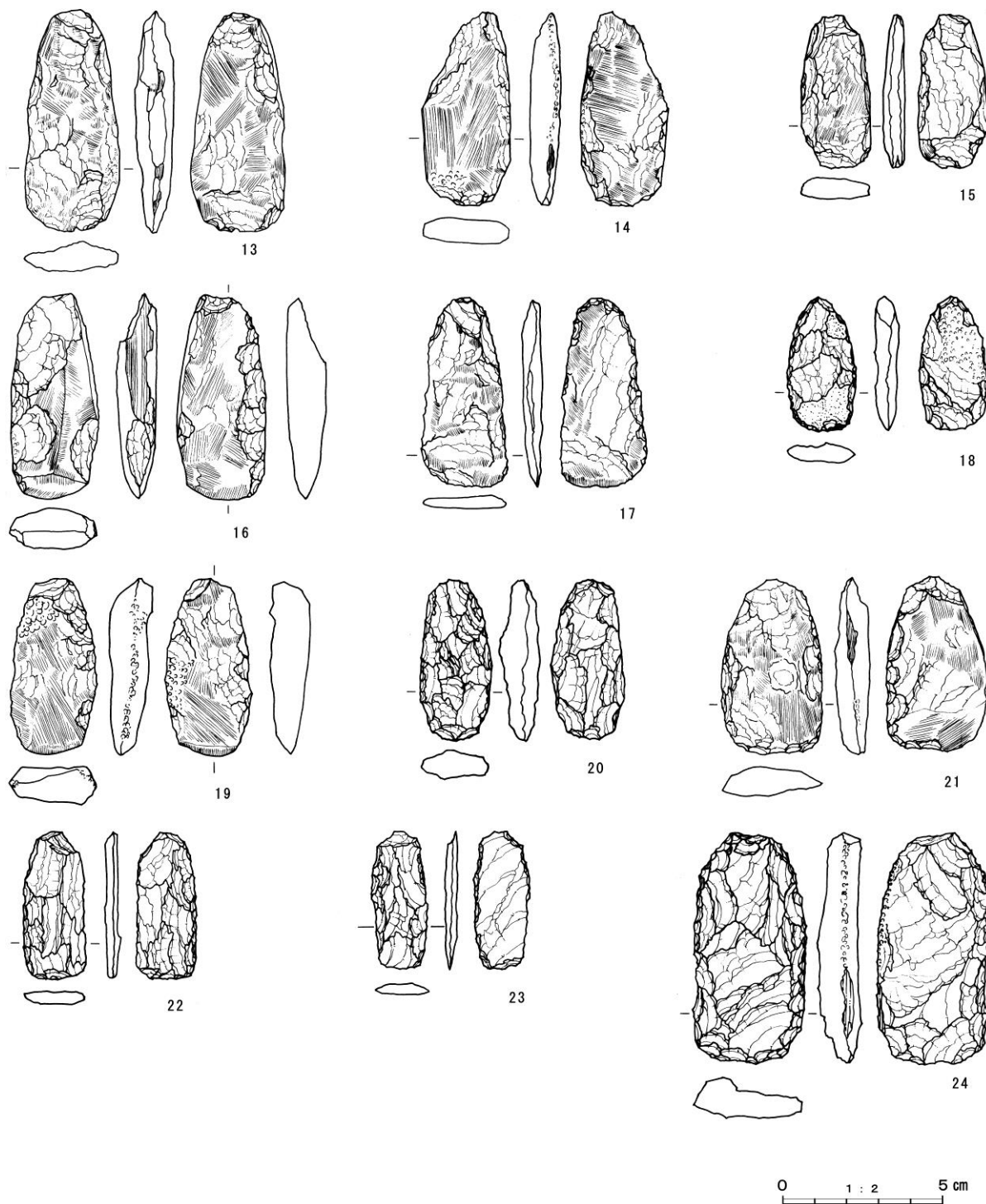
第2図 川目A遺跡出土磨製石斧（1）

表-1

遺物番号	遺跡名	時代／時期	名称(器種)	石材等	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重さ(g)	比重	厚幅比	長幅比	特徴等	備考	台帳NO
1	川目A	縄文 後・晩期	小型磨製石斧	緑泥石含有ネフライト	6.20	2.06	0.56	11.80	2.95	0.27	3.01	短冊形 完成品	川目A遺跡第3次調査	b832
2	川目	縄文 後・晩期	小型磨製石斧	緑泥石含有ネフライト	5.30	1.68	0.85	11.10	2.92	0.51	3.15	短冊形 完成品	古澤資料	b1150
3	川目	縄文 後・晩期	小型磨製石斧	緑泥石含有ネフライト	6.02	2.25	0.80	15.70	2.96	0.36	2.68	短冊形 未成品	奥資料	b1449
4	川目	縄文 後・晩期	小型磨製石斧	ネフライト	5.45	1.87	0.90	15.30	2.94	0.48	2.91	短冊形 未成品	古澤資料	b1144
5	川目	縄文 後・晩期	小型磨製石斧	緑泥石緑泥石含有ネフライト	5.96	2.60	0.98	17.90	2.93	0.38	2.29	未成品、基部欠損	奥資料	b1476
6	川目	縄文 後・晩期	小型磨製石斧	ワロン鉄鉱-緑泥石含有ネフライト	6.16	2.50	0.65	16.30	2.96	0.26	2.46	短冊形 再加工	古澤資料	b1146
7	川目	縄文 後・晩期	小型磨製石斧	緑泥石含有ネフライト	4.05	2.00	0.70	8.40	3.00	0.35	2.03	短冊形 基部欠損	武田資料	b1221
8	川目	縄文 後・晩期	小型磨製石斧	緑色片岩(石英質)	5.69	2.46	1.08	21.90	2.54	0.44	2.31	未成品	奥資料	b1451
9	川目	縄文 後・晩期	小型磨製石斧	緑泥石含有ネフライト	4.27	1.60	1.09	8.00	2.85	0.68	—	刃部欠損	奥資料	b1477
10	川目	縄文 後・晩期	小型磨製石斧	緑泥石含有ネフライト	3.90	1.42	0.50	3.30	2.75	0.35	2.75	未成品	武田資料	b1215
11	川目	縄文 後・晩期	小型磨製石斧	閃緑岩	4.04	1.35	0.50	3.00	2.72	0.37	2.99	未成品	奥資料	b1467
12	川目	縄文 後・晩期	小型磨製石斧	緑泥石緑泥石含有ネフライト	2.34	1.50	0.70	3.60	2.76	0.47	—	基部欠損	奥資料	b1445

未成品

13～24 は成形剥離痕が残る小型磨製石斧未成品で、18・20・22～24 は研磨痕が認められない。24 は側面に原石面がみられ、原石面は河床転礫のような細かい衝撃傷はなく、節理面に生じる光沢を残すことから、岩体由来の石材である可能性がある。13～17・19・21 は研磨加工中と思われる未成品で、14・15・21 のように研磨加工中に剥離成形をおこなうものもある。15 のA面刃部付近には円礫皮面が残されており、石材は河床や礫層に含まれる転石（円礫）を利用したことが推測される。



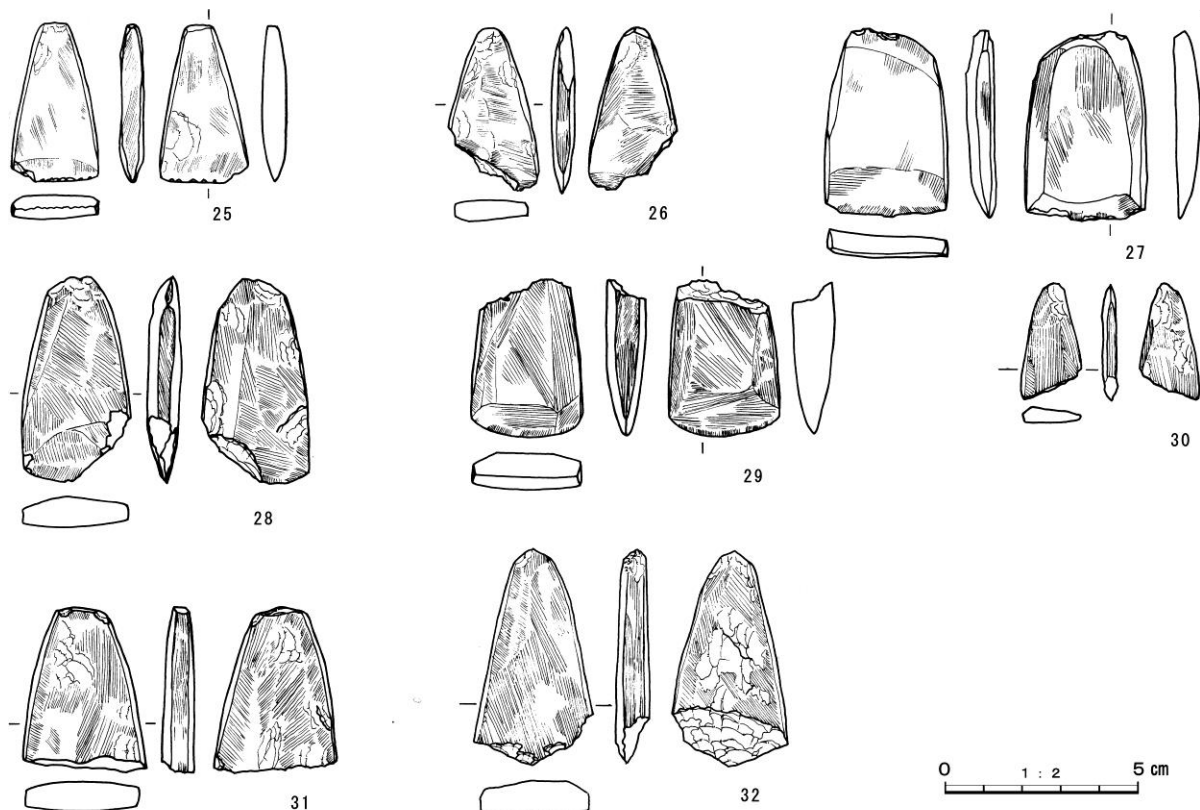
第3図 川目A遺跡出土磨製石斧（2）

直刃

25～29 は刃部幅が広い小型磨製石斧で、25～27 は刃部の平面形状が直刃を、断面形状は両刃状を呈する。27・28 は両端に刃部を持つ小型磨製石斧で、27 は側面に擦切痕と思われる段が両側面に観察され、断面形状は 27・28 共に片刃状を呈する。なお、盛岡地域では縄文時代後・晩期において擦切技法は見られないことから他時期の製作かもしれない。

欠損品

29 は刃部が偏刃状に近い平面形状、断面形状は片刃状を呈する。30～32 は刃部が欠損する小型磨製石斧である。



第4図 川目A遺跡出土磨製石斧（3）

表-2

遺物番号	遺跡名	時代／時期	名称(器種)	石材等	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重さ(g)	比重	厚幅比	長幅比	特徴等	備考	台帳NO
13	川目	縄文 後・晩期	小型磨製石斧	緑泥石含有ネフライト	6.93	3.96	1.30	34.20	3.00	0.33	1.75	未成品	奥資料	b1447
14	川目	縄文 後・晩期	小型磨製石斧	緑泥石含有ネフライト	6.10	2.80	1.05	24.40	2.90	0.38	2.18	未成品	奥資料	b1485
15	川目	縄文 後・晩期	小型磨製石斧	緑泥石含有ネフライト	4.90	2.16	0.79	11.60	2.97	0.37	2.27	未成品	奥資料	b1480
16	川目A	縄文 後・晩期	小型磨製石斧	緑泥石含有ネフライト	6.45	2.75	1.32	32.10	3.05	0.48	2.35	未製品	旧川目小学校	b856
17	川目	縄文 後・晩期	小型磨製石斧	緑泥石含有ネフライト	6.05	2.65	0.65	13.00	3.02	0.25	2.28	未成品	奥資料	b1486
18	川目	縄文 後・晩期	小型磨製石斧	緑泥石含有ネフライト	4.30	2.20	0.75	8.40	2.80	0.34	1.95	未成品	奥資料	b1478
19	川目	縄文 後・晩期	小型磨製石斧	緑泥石含有ネフライト	5.58	2.65	1.25	26.10	2.90	0.47	2.11	未成品	奥資料	b1465
20	川目	縄文 後・晩期	小型磨製石斧	緑泥石含有ネフライト	5.02	2.20	1.25	17.30	2.98	0.57	2.28	未成品	奥資料	b1468
21	川目	縄文 後・晩期	小型磨製石斧	緑泥石含有ネフライト	5.55	3.15	1.15	26.40	2.86	0.37	1.76	未成品	奥資料	b1446
22	川目	縄文 後・晩期	小型磨製石斧	緑泥石含有ネフライト	4.69	1.95	0.36	5.30	2.94	0.18	2.41	未成品	奥資料	b1479
23	川目	縄文 後・晩期	小型磨製石斧	緑泥石含有ネフライト	4.40	1.60	0.40	3.60	3.00	0.25	2.75	未成品	奥資料	b1490
24	川目	縄文 後・晩期	小型磨製石斧	緑泥石含有ネフライト	7.20	3.45	1.30	50.7	3.03	0.38	2.09	未成品	奥資料	b1448
25	川目	縄文 後・晩期	小型磨製石斧	緑泥石含有ネフライト	4.07	2.20	0.70	9.40	2.84	0.32	1.85	直刃	武田資料	b1218
26	川目	縄文 後・晩期	小型磨製石斧	緑泥石含有ネフライト	4.25	2.35	0.66	9.90	2.82	0.28	1.81	直刃	武田資料	b1219
27	川目A	縄文 後・晩期	小型磨製石斧	ネフライト	4.85	3.23	0.75	19.90	2.88	0.23	1.50	両頭・直刃	旧川目小学校	b855
28	川目	縄文 後・晩期	小型磨製石斧	緑泥石含有ネフライト	5.29	2.76	0.90	20.80	2.97	0.33	1.92	両頭	古澤資料	b1149
29	川目	縄文 後・晩期	小型磨製石斧	緑泥石含有ネフライト	4.00	2.83	1.05	18.20	2.84	0.37	—	基部欠損	古澤資料	b1148
30	川目	縄文 後・晩期	小型磨製石斧	緑泥石含有ネフライト	3.07	1.54	0.40	2.50	2.77	0.26	—	刃部欠損	奥資料	b1484
31	川目	縄文 後・晩期	小型磨製石斧	緑泥石含有ネフライト	4.25	3.20	0.93	20.00	2.94	0.29	—	刃部欠損	武田資料	b1220
32	川目	縄文 後・晩期	小型磨製石斧	緑泥石含有ネフライト	5.54	3.00	0.88	20.80	2.97	0.29	—	刃部欠損	奥資料	b1453

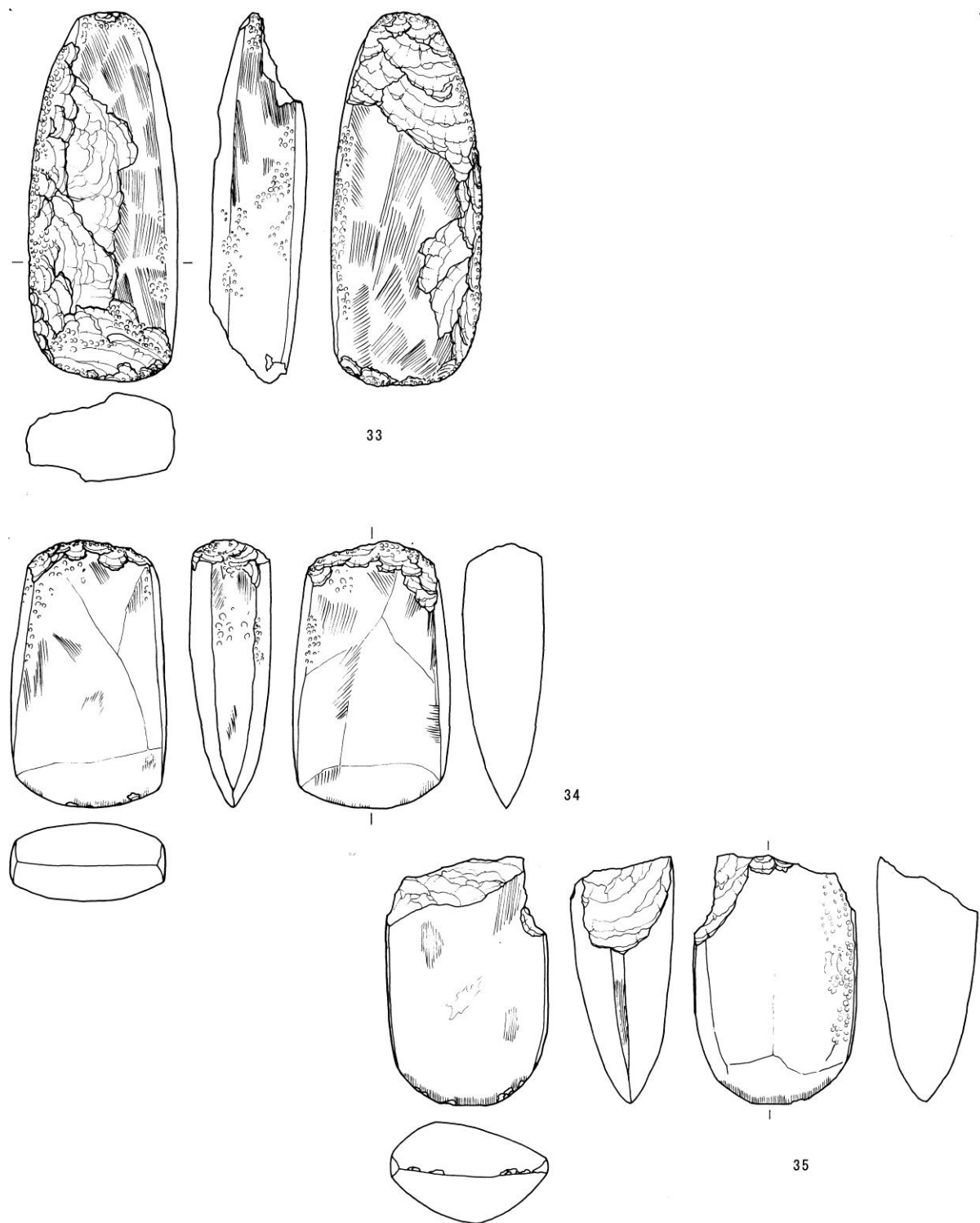


表-3

第5図 川目A遺跡出土磨製石斧（4）

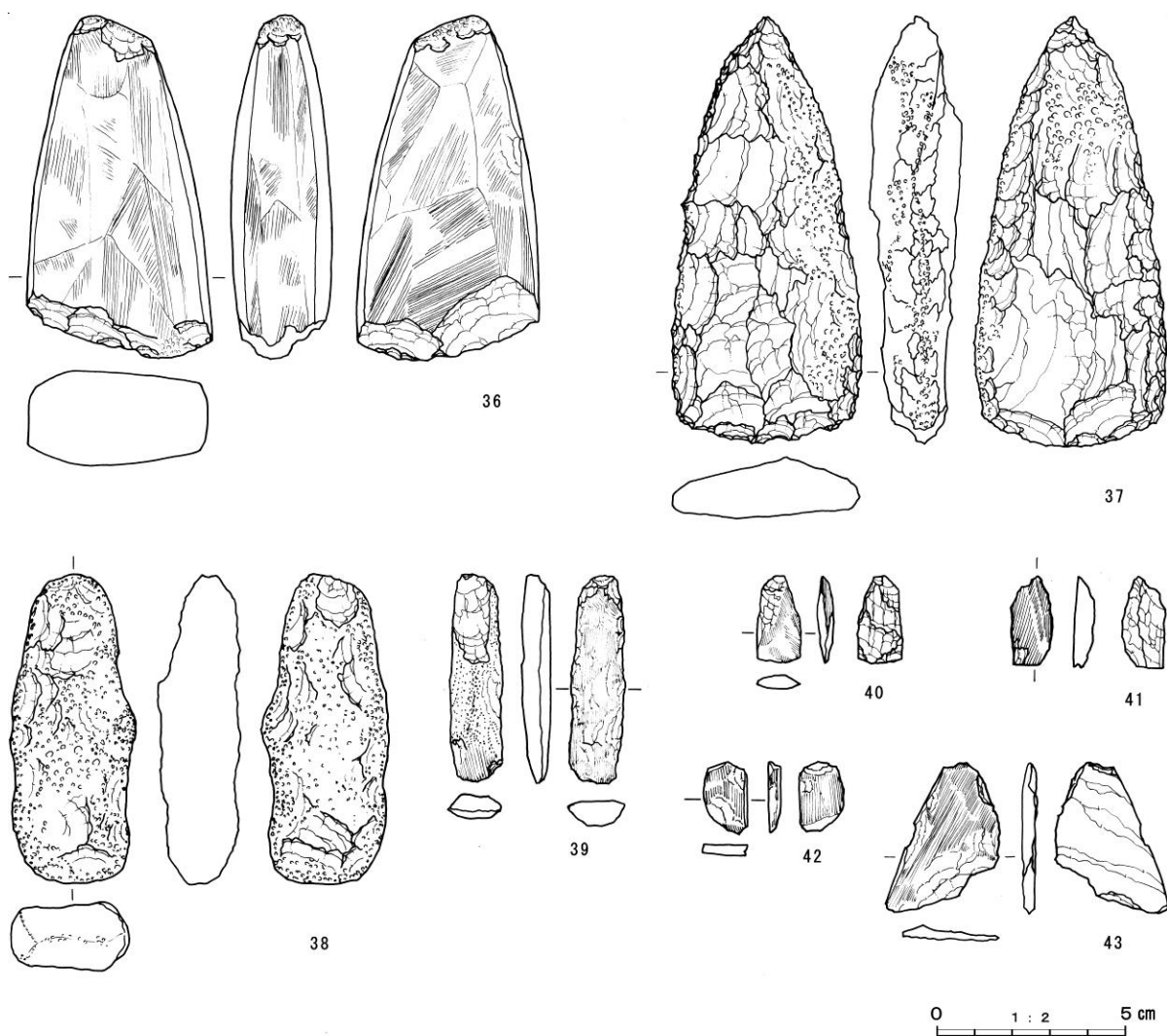
0 1 : 2 5 cm

遺物番号	遺跡名	時代／時期	名称(器種)	石材等	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重さ(g)	比重	厚幅比	長幅比	特徴等	備考	台帳NO
34	川目A	縄文 後・晩期	中型磨製石斧	緑泥石緑礫石含有ネフライト	8.20	4.80	2.50	168.80	3.00	0.52	—	基部に打撃痕	川目A遺跡第3次調査	b835
35	川目A	縄文 後・晩期	中型磨製石斧	緑泥石緑礫石含有ネフライト	7.85	5.02	3.26	177.60	2.95	0.65	—	基部に打撃痕	武田資料	b1222
36	川目A	縄文 後・晩期	中型磨製石斧	蛇紋岩	8.93	4.80	2.70	155.60	2.64	0.56	—	両端打撃痕	川目A遺跡第3次調査	b841
37	川目A	縄文 後・晩期	中型磨製石斧	緑泥石緑礫石含有ネフライト	11.20	4.96	2.30	149.80	2.88	0.46	2.26	未完成	旧川目小学校	b858
38	川目	縄文 後・晩期	磨製石斧?	緑閃石含有緑泥石緑礫石片岩	8.10	3.30	2.05	81.10	2.83	0.62	2.45	未完成	奥資料	b1442
39	川目	縄文 後・晩期	小型磨製石斧	緑泥石緑礫石含有ネフライト	5.55	1.40	0.75	7.40	2.96	0.54	3.96	未完成	奥資料	b1483
40	川目	縄文 後・晩期	—	緑泥石緑礫石含有ネフライト	2.40	1.18	0.45	1.30	2.60	0.38	—	研磨剥片	奥資料	b1475
41	川目	縄文 後・晩期	—	緑泥石緑礫石含有ネフライト	2.50	1.16	0.53	1.30	2.60	0.46	—	研磨剥片	奥資料	b1472
42	川目	縄文 後・晩期	—	ネフライト	1.85	1.15	0.35	1.30	2.60	0.30	—	研磨剥片	奥資料	b1471
43	川目	縄文 後・晩期	—	緑泥石緑礫石含有ネフライト	4.00	2.50	0.40	5.00	2.94	0.16	—	研磨剥片	奥資料	b1481

中型磨製石斧 33 は欠損した石斧を再加工したもので、全面に剥離痕・敲打痕が見られる。34 は基部を再加工しており、35 は敲打による剥離がある磨製石斧刃部である。36 は刃部を欠いた磨製石斧を「楔」のように利用したものと思われ、両端に衝撃による剥離と敲打痕が認められる。33～36 の断面形状は角のある所謂「定角式」を呈する。

未成品（剥離・敲打成形段階） 37 は剥離・敲打による成形途中の磨製石斧未成品で、A・B・C面の一部は剥離の過程で生じた稜を敲打で平坦に調整する。成形剥離は基部に向かうように連続で行い、刃部形成は剥離成形の最終段階で行うようである。38 は全体の凹凸を除去するため敲打を施した石斧未成品と思われる。なお、37・38 には刃部方向・基部方向両極からの打撃痕が観察され、両極技法を用いて剥離成形することがあったことをうかがわせる。39 は薄い縦長状の剥片を研磨するもので、A面の刃部、C面全体に研磨痕が見られる。

研磨痕のある剥片 40～43 は研磨痕のあるネフライト剥片である。40・41・43 は片面、42 は両面に研磨が施される。



第6図 川目A遺跡出土磨製石斧（5）



第1写真図版 川目A遺跡出土磨製石斧（1）



第2写真図版 川目A遺跡出土磨製石斧（2）

2 沢田遺跡の概要

遺跡の位置 沢田遺跡は築川の下流、北上川との合流点より東に約 1.8 kmの地点に位置し（第 1 図）、築川南岸に発達する低位河岸段丘上に立地する。昭和 30～40 年代は点在する民家と畑地・果樹園が広がっていたが、現在は大部分が果樹園として利用されている。

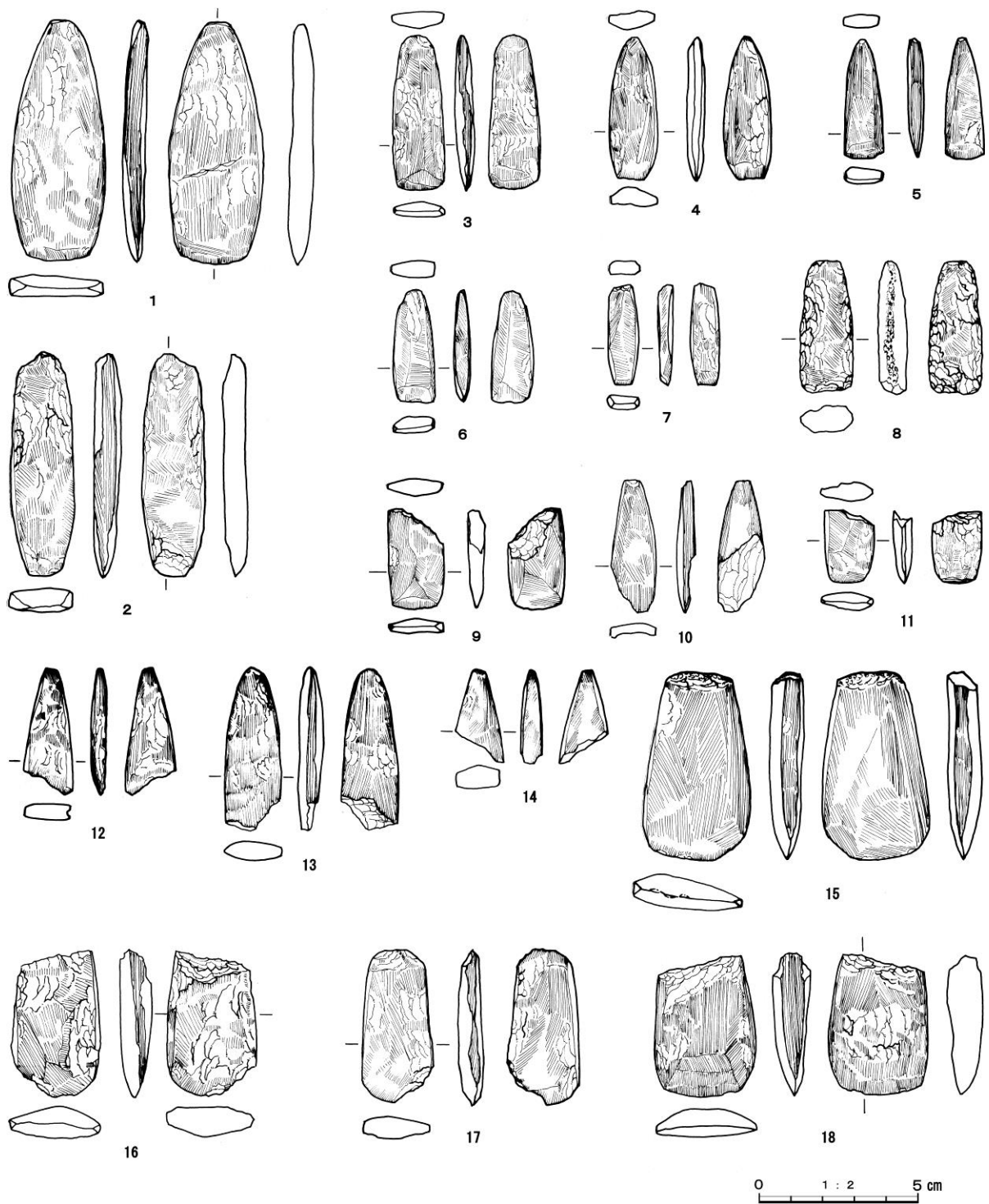
発掘調査は過去、現在においても行われておらず、詳細は不明である。遺跡で表採できる土器片を見ると、縄文時代後期（宮戸Ⅲa・b 式期）、晩期（大洞 B～A' 式）、弥生時代前期（砂沢式）など多時期にわたる土器が見られ、特に大洞 A 式以降の土器が多く散在する。過去においては大洞 A 式期の大型土偶が発見されており、現在は岩手県立博物館で保管・展示されている。

今回紹介する小型磨製石斧は、奥健夫氏によって昭和 20～30 年代に採集されたものが中心で、古澤資料、盛岡市中央公民館旧所蔵資料にも沢田遺跡より採集された資料が散見される。奥氏によって採集された石器は数百点といわれ、その一部は前述した盛岡市史で紹介されている。その中に「蛇紋岩製」小型磨製石斧が含まれている。奥氏によって採集された小型磨製石斧を概観すると、ネフライトや輝緑岩を石材とした未成品も含まれており、川目 A 遺跡同様、沢田遺跡も石斧製作を行っていた可能性がある。

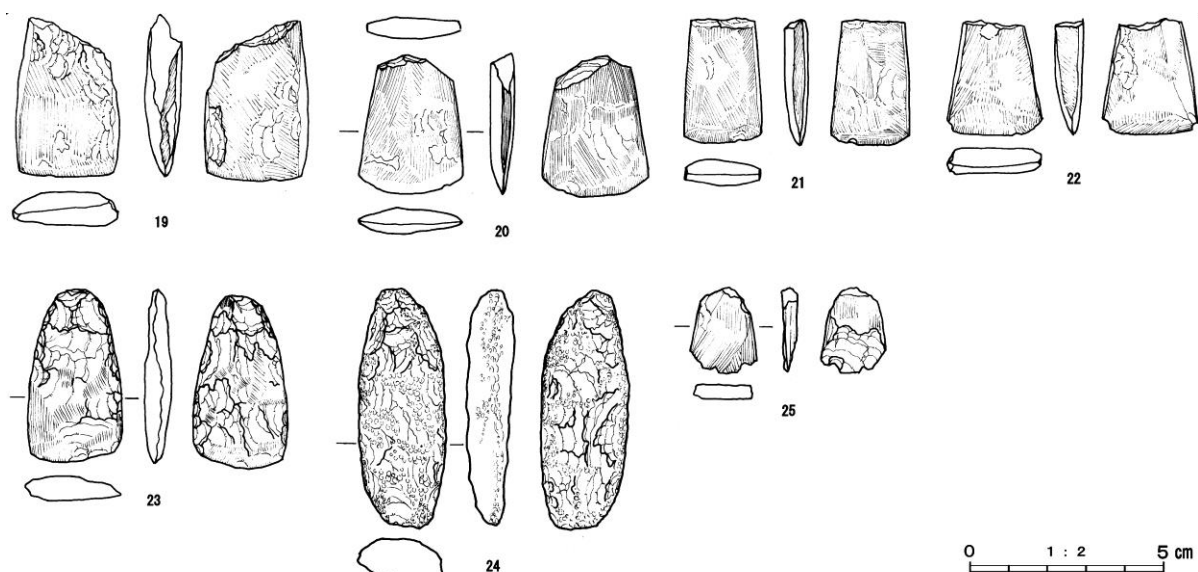
磨製石斧（第 7 図 1～第 8 図 25）

小型磨製石斧 1～14 は短冊形を呈する小型磨製石斧、1～7 は完成品、8 は未成品、9～14 は欠損品である。1 は最大長 7.67 cm をはかり、長さでは中型の部類となる磨製石斧であるが、器厚が 0.78 cm と薄いことから小型磨製石斧とした。2・5・6 は刃部に最大幅を持つ小型磨製石斧で、3・4・7 は刃部幅が狭く、鑿状となる小型磨製石斧である。特に 7 は刃部幅を狭くするために側面を研磨により成形している。8 は剥離成形後、両面を研磨するもので側面と刃部が研磨されていない未成品である。9・11 は基部を大きく欠く小型磨製石斧であるが、折面に再加工と思われる微細な剥離痕が見られる。10・12～14 は刃部を欠く小型磨製石斧で、10・12～14 は F 面（頭頂部）を平坦に研磨されている。

15～23 は刃部幅広の所謂「撥形」を呈する小型磨製石斧で、15～18 は円刃、19～22 は直線状を呈する。15～18 は刃部が弧状を呈する円刃の小型磨製石斧である。15・17 は F 面に敲打によるものと思われる剥離痕があり、16・18・19・20 は基部に剥離成形面を残す。21 は基部を水平に剥離調整するもので、22 も 21 と同様の調整を施すものだが、意図したものか破損か判然としない。23 は刃部と中軸上に研磨痕が見られ、側縁には剥離成形時の剥離面が残る。24 は敲打による成形途中の小型磨製石斧未成品である。25 は小型磨製石斧基部の欠損箇所又は再加工中の未成品と思われるものである。



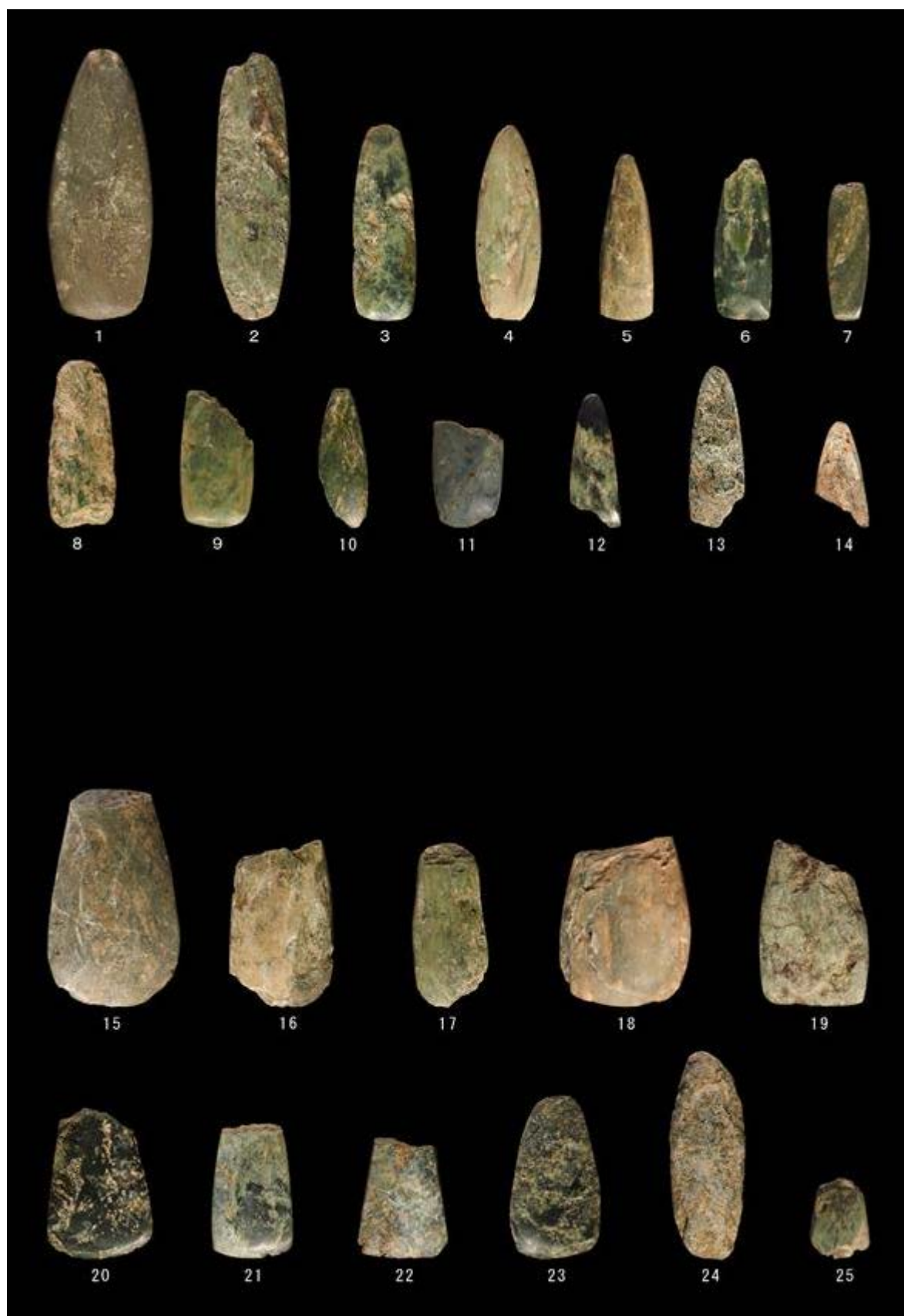
第7図 沢田遺跡出土磨製石斧（1）



第8図 沢田遺跡出土磨製石斧（2）

表-4

遺物 番号	遺跡名	時代／時期	名称(器種)	石材等	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重さ(g)	比重	厚幅比	長幅比	特徴等	備考	台帳NO
1	沢田	縄文 後・晩期	磨製石斧	緑色片岩(石英質)	7.67	3.05	0.78	27.80	2.67	0.26	2.51		奥資料	b1351
2	沢田	縄文 後・晩期	小型磨製石斧	緑泥石緑簾石含有ネフライト	7.05	2.05	0.85	20.10	3.00	0.41	3.44	未製品	奥資料	b1355
3	沢田	縄文 後・晩期	小型磨製石斧	緑泥石緑簾石含有ネフライト	4.97	1.65	0.66	8.90	2.96	0.40	3.01		奥資料	b1372
4	沢田	縄文 後・晩期	小型磨製石斧	ネフライト	4.64	1.60	0.67	6.60	2.86	0.42	2.90		奥資料	b1376
5	沢田	縄文 後・晩期	小型磨製石斧	緑泥石緑簾石含有ネフライト	3.88	1.31	0.63	5.00	2.94	0.48	2.96		奥資料	b1373
6	沢田	縄文 後・晩期	小型磨製石斧	緑泥石含有ネフライト	3.60	1.35	0.64	4.80	3.00	0.47	2.67		奥資料	b1375
7	沢田	縄文 後・晩期	小型磨製石斧	緑泥石含有ネフライト	3.21	1.05	0.51	2.90	2.90	0.49	3.06		奥資料	b1374
8	沢田	縄文 後・晩期	小型磨製石斧	緑泥石含有ネフライト	4.18	0.99	0.95	11.10	3.00	0.96	4.22		中央公民館	b1523
9	沢田	縄文 後・晩期	小型磨製石斧	(緑泥石)ネフライト	3.19	1.80	0.60	4.60	2.87	0.33	-	基部欠損	奥資料	b1369
10	沢田	縄文 後・晩期	小型磨製石斧	緑泥石緑簾石含有ネフライト	4.27	1.55	0.70	5.30	2.94	0.45	-	刃部欠損	奥資料	b1362
11	沢田	縄文 後・晩期	小型磨製石斧	緑泥石緑簾石含有ネフライト	2.36	1.65	0.63	3.10	2.81	0.38	-	基部欠損	奥資料	b1365
12	沢田	縄文 後・晩期	小型磨製石斧	緑泥石含有ネフライト	4.02	1.54	0.60	5.00	2.94	0.39	-	刃部欠損	奥資料	b1363
13	沢田	縄文 後・晩期	小型磨製石斧	緑泥石緑簾石含有ネフライト	5.20	1.76	0.80	10.10	2.97	0.45	-	刃部欠損	奥資料	b1359
14	沢田	縄文 後・晩期	小型磨製石斧	緑泥石緑簾石含有ネフライト	3.05	1.46	0.78	4.20	2.80	0.53	-	刃部欠損	奥資料	b1366
15	沢田	縄文 後・晩期	磨製石斧	緑泥石緑簾石含有ネフライト	5.93	3.54	1.15	35.60	2.73	0.32	1.68		奥資料	b1352
16	沢田	縄文 後・晩期	小型磨製石斧	緑泥石含有ネフライト	4.68	2.74	0.98	19.00	2.92	0.36	-	基部欠損	中央公民館	b1522
17	沢田	縄文 後・晩期	小型磨製石斧	緑泥石緑簾石含有ネフライト	4.85	2.28	0.82	14.60	2.92	0.36	2.13	未製品	奥資料	b1353
18	沢田	縄文 後・晩期	磨製石斧	緑色片岩(石英質)	4.41	3.13	1.15	20.30	2.63	0.37	1.41	透閃石を含む、基部欠損	奥資料	b1368
19	沢田	縄文 後・晩期	小型磨製石斧	緑泥石緑簾石含有ネフライト	4.13	2.75	0.95	16.30	3.07	0.35	1.50	未製品、刃部欠損	奥資料	b1356
20	沢田	縄文 後・晩期	小型磨製石斧	緑簾石緑泥石含有ネフライト	3.70	2.74	0.70	9.40	2.93	0.26	-	基部欠損	奥資料	b1354
21	沢田	縄文 後・晩期	小型磨製石斧	緑泥石緑簾石含有ネフライト	3.27	2.05	0.68	7.60	2.92	0.33	-	基部欠損	奥資料	b1364
22	沢田	縄文 後・晩期	小型磨製石斧	蛇紋岩	3.00	2.48	0.78	7.90	2.54	0.31	-	基部欠損	奥資料	b1360
23	沢田	縄文 後・晩期	小型磨製石斧	緑泥石緑簾石含有ネフライト	4.48	2.59	0.75	11.80	3.02	0.29	1.73		奥資料	b1361
24	沢田	縄文 後・晩期	小型磨製石斧	緑泥石緑簾石片岩	6.13	2.28	1.18	23.70	2.82	0.52	2.69	未製品	奥資料	b1377
25	沢田	縄文 後・晩期	小型磨製石斧	緑泥石含有ネフライト	2.27	1.73	0.57	2.70	3.00	0.33	-	刃部欠損	奥資料	b1367



第3写真図版 沢田遺跡出土磨製石斧

Ⅲ おわりに

奥健夫氏・古澤典夫氏・武田良夫氏表面採集資料、盛岡市遺跡の学び館所蔵川目A遺跡・沢田遺跡出土の磨製石斧を整理した結果、盛岡市史など過去の紹介において「蛇紋岩製」とされてきた磨製石斧、特に小型磨製石斧の多くが *p*-XRF 法による化学分析の結果、微細な緑閃石が集合した「ネフライト」を利用した製品であることが明らかにされた。

川目A遺跡・沢田遺跡表面採集資料には磨製石斧の未成品が数多く見られることから、川目A遺跡は須原の見解通り、在地石材による石器製作（石斧他）に関係する遺跡であることが追認された。

ネフライト製小型磨製石斧について現在までの所見を述べる。盛岡近郊における縄文時代の石斧石材である閃緑岩・輝緑岩・角閃石斑糲岩・蛇紋岩等の変成岩類は築川流域など北上山地を源流とする河川で転石として観察されるが、ネフライトは築川より北を東西に流れる中津川流域で比較的多く見られ、築川流域では築川支流である根田茂川上流の原沢地区で僅かに確認されているのみである。築川本流ではまだ転石等が確認されていないことから、存在しても極めて少ないことが想定される。このことから、ネフライトは築川の北岸を東西に連なる山稜を越えた中津川流域から入手していた可能性がある。距離的には直線約 5.2 km で中津川に至ることから活動圏内に収まる範囲だろう。また、中津川と米内川の合流点付近に位置する落合遺跡では、後期前葉から晩期前葉にかけての土器と共に、ネフライトを石材とした石製品・石斧（完成品・未成品）、原石等が 500 点以上出土しており（整理中）、同時期である川目A遺跡との関連（石材供給元）が注目される。また、中津川上流の大葛地区に所在する上大葛遺跡では後期中葉の宝ヶ峰式土器と共に、ネフライト製小型磨製石斧未成品や剥片が出土しており興味深い。この上大葛遺跡に隣接する大葛遺跡では昭和 62 年に発掘調査が実施され、後期初頭（門前式併行期）の集落が確認されている。調査では、後期初頭の遺物が多量に出土しているが、ネフライト製品は出土していない。同様の傾向は、中津川下流に所在する柿ノ木平遺跡でも見られ、後期初頭段階では積極的なネフライトの利用は見られないことがうかがえる。しかし、落合遺跡・川目A遺跡など後期前葉の大湯式（十腰内 1・2 式）段階以降の遺物が出土する遺跡では、ネフライト製小型磨製石斧が見られることから、概ね後期前葉以降に流行した石器なのであろう。

ネフライト製小型磨製石斧の用途であるが、本文でも触れたように盛岡産ネフライトには緑泥石や滑石を含有するものが多く、石質の違いにより細かい節理面が生じているものがある。実用すると破損することも想定されることから、打撃を目的とした製品と異なる目的を持つ製品と見るべきであろう。しかし、研磨することによって得られる樹脂状の光沢や、使用を示す明確な痕跡（刃こぼれ）や破損の少なさ、第 7 図 6・7 のように最大長が 4 cm に満たない製品の存在は、非実用的な製品であることを思わせる。

今回は資料紹介にとどまるが、化学分析により産地原石と出土遺物の成分を同定して得た成果は、各地で発見されるネフライト製品を検討する上で重要な指標となることだろう。本図集が、ネフライト（軟玉）製石製品を研究する一助になれば幸いである。

引用・参考文献

- ・相原淳一・飯塚義之(2020)「宮城県蔵王町明神裏遺跡出土のネフライト製磨製石斧ほか―宮地祐一氏・後藤勝彦氏採集資料から―」『宮城考古学』第22号：231-240
- ・飯塚義之(2010)「台湾産玉(ネフライト)の拡散と東南アジアの先史文化」『海の道と考古学 インドシナ半島から日本へ』：51-65
- ・飯塚義之(2012)「考古鉱物学：低真空走査型電子顕微鏡(LV-SEM)による玉器の分析とその成果」『日本電子ニュース』44：23-39
- ・飯塚義之・小野章太郎(2020)「完全非破壊化学分析による宮城県地域の縄文時代磨製石斧および石製装身具の石材研究」『宮城考古学』第22号：137-156
- ・飯塚義之・杉野森淳子(2020)「完全非破壊化学分析による石器石材研究―青森県立郷土館収蔵石製品の石材同定―」『青森県立郷土館研究紀要』第44号：35-40
- ・飯塚義之(2021)「完全非破壊化学分析法による磨製石器石材の研究」第2回物流・交易を考える会発表要旨集
- ・飯塚義之・杉野森淳子・秦光次郎(2021)「非破壊化学分析法による青森県地域の縄文石器石材の化学分析(第2報)」青森県埋蔵文化財調査センター『紀要』第26号：1-6
- ・飯塚義之(2023)「岩石学からみた考古遺物の研究―北陸地方縄文時代前期のネフライト製石器とその来源―」日本考古学協会2023年度宮城大会『災害と境界の考古学』研究発表資料集：203-212
- ・飯塚義之・小野章太郎・神原雄一郎・樋下理沙(2023)「東北地方太平洋側における縄文時代石器石材研究―盛岡産ネフライトとその利用形態―」日本考古学協会2023年度宮城大会『災害と境界の考古学』研究発表資料集：451
- ・(財)岩手県埋蔵文化財センター(1986)「手代森遺跡発掘調査報告書」(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第108集
- ・(財)岩手県埋蔵文化財センター(1995)「上米内遺跡発掘調査報告書」(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第220集
- ・(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター(2009)「川目A遺跡第6次発掘調査報告書」(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第525集
- ・(公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター(2012)「川目A遺跡第5次発掘調査報告書」(公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第589集
- ・内野隆之・川村信人・川村寿郎(2008)「北上山地前期石炭紀付加体「根田茂帯」の構成岩相と根田茂帯・南部北上帯境界」『地質学雑誌』第114巻：141-157
- ・内野隆之・川村信人(2010)「根田茂帯の変玄武岩から見出された藍閃石とその意義」『地質調査研究報告』第61巻第11/12号：445-452
- ・内野隆之・小松原琢(2024)「外山地域の地質」国立研究開発法人 産業技術総合研究所 地質調査総合センター
- ・(財)岩手県埋蔵文化財センター(1982)御所ダム建設関連遺跡発掘調査報告書「盛岡市 荊内遺跡(Ⅰ)・(Ⅱ)・(Ⅲ)」(財)岩手県埋蔵文化財センター文化財調査報告書第32集
- ・大上知良・大石雅之(1983)「早池峰超塩基性岩体中に分布する変成岩について」『地質学雑誌』第89巻第6号：362-364
- ・大貫仁(1967)「北上山地の超塩基性岩類にみられる変成鉱物(3)透角閃石」『岩石鉱物鉢床学会誌』58巻4号：136-142
- ・大貫仁・柴正敏・香川浩昭・堀弘(1988)「北部北上山地の低温広域変成岩類 Ⅰ. 区界―盛岡地域」岩鉱83：495-506
- ・大迫町教育委員会(1979)「立石遺跡―昭和52年・53年度発掘調査報告書―」大迫町埋蔵文化財報告第3集
- ・大迫町教育委員会(1979)「小田遺跡発掘調査報告書」大迫町埋蔵文化財報告第4集
- ・岡本東三(1982)「日本の美術2」『N0189縄文時代Ⅰ(早期・前期)』至文堂
- ・小澤一仁・前川寛和・石渡明(2013)「オルドビス紀―デボン紀島弧系の復元と発達過程：岩手県早池峰宮守オフィオライトと母体高圧変成岩類」『地質学雑誌』第119巻：134-153
- ・小野章太郎(2021)「石材分析から見た宮城県地域の縄文時代磨製石斧および石製装身具の特徴」第2回物流・交易を考える会発表要旨集
- ・小野章太郎(2023)「内陸湖沼地帯における縄文晩期の遺跡群」日本考古学協会2023年度宮城大会『災害と境界の考古学研究発表資料集：121-130
- ・川村寿郎・内野隆之・川村信人・吉田孝紀・中川充・永田秀尚(2013)「早池峰山地域の地質」独立行政法人 産業技術総合研究所地質調査総合センター
- ・菅野智則(2023)「東北地方の縄文文化の地域性研究に関する一試論」日本考古学協会2023年度宮城大会『災害と境界の考古学』発表資料集：141-150
- ・神原雄一郎・高木晃・鈴木克彦(2005)「岩手県盛岡市浅岸発見の滑石産地調査」『玉文化』第2号：89-96
- ・草間俊一(1951)「盛岡市史―先史期―」盛岡市役所 盛岡市史編纂委員会
- ・草間俊一(1954)「岩手県川目遺跡調査概報」岩手大学学芸学部研究年報第7巻
- ・草間俊一(1955)「岩手県川目遺跡調査報告(第2報)」岩手大学学芸学部研究年報第9巻
- ・熊谷常正(2013)「南部北上高地における粘板岩系石器の研究」平成22-24年度科学研究費補助金(基盤研究(C))研究成果報告書
- ・笹津備洋(1956)「小形石斧を収蔵せる注口土器の一例」『石器時代』N03：62
- ・佐原真(1994)「斧の文化史」考古学選書(6) 東京大学出版会
- ・須原拓(2013)「川目A遺跡出土の磨製石斧にみる石斧生産について」(公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター紀要XXXⅡ：59-68
- ・関陽太郎(1952)「岩手県宮守地方の超塩基性岩類の研究(その5)―滑石鉱床について―」『岩石鉱物鉢床学会誌』第36巻第5号
- ・高橋哲(2016)「磨製石斧の生産と流通」日本考古学協会2016年度弘前大会第1分科会『津軽海峡圏の縄文文化 研究報告資料集：57-110
- ・富山県教育委員会(1990)「境A遺跡―石器編」北陸自動車道遺跡調査報告 朝日町編5
- ・富山県埋蔵文化財センター(2012)「浦山寺蔵遺跡―出土品集2」富山県埋蔵文化財センター 富山県出土の重要考古資料5
- ・中村由克(2010)「野尻湖遺跡群の石器群と石材利用」『考古学ジャーナル』N0598：3-7
- ・中村由克(2011)「旧石器時代における石斧の石材鑑定」『野尻湖ナウマンゾウ博物館研究報告』第19号：31-54
- ・中村由克(2017)「北陸系石材の三内丸山遺跡への波及の研究」青森県教育委員会『特別史跡三内丸山遺跡年報-20-』
- ・中村由克(2021)「北上(早池峰)産と北陸(青海―蓮華地域)産透閃石岩の特徴と識別」第2回物流・交易を考える会発表要旨集
- ・名久井文明(2023)「民俗考古学―必要が生んだ継続性」物質文化研究所 一芦舎
- ・長谷川汰河・道林克禎・小澤一仁(2017)「岩手県早池峰―宮守オフィオライト―かんらん岩の構造岩石学的特徴―」『静岡大学地球

- 科学研究報告』第44号：31～46
- ・広川治・吉田尚(1956)「5萬分の1地質図幅説明書「大 迫」(秋田―第33号)」地質調査所
 - ・水ノ江和同他(2024)「日本列島における縄文磨製石斧の基礎的研究」令和3～5年度科学研究費 基盤研究C 課題番号 21K00977：32～42「㊦ 東北地方(八木勝枝)」
 - ・宮城県教育委員会(1968)「埋蔵文化財第三次緊急発掘調査概報―南境貝塚―」宮城県文化財調査報告書第15集
 - ・宮城県教育委員会(1969)「埋蔵文化財第四次緊急発掘調査概報―南境貝塚―」宮城県文化財調査報告書第20集
 - ・宮島 宏(2004)「日本各地の硬玉・軟玉の産地」『季刊考古学第89号―縄文時代の玉文化―』：43～44
 - ・盛岡市教育委員会(1984)「繫遺跡 ―昭和58年度発掘調査概報―」
 - ・盛岡市教育委員会(1994)「上平遺跡群(上平遺跡) ―第4次発掘調査概報(石器)―」
 - ・盛岡市教育委員会(1995)「上平遺跡群 猪去館・上平Ⅱ遺跡―平成4・5年度発掘調査概報―」
 - ・盛岡市教育委員会(1995)「大葛遺跡―第1次発掘調査報告書―」
 - ・盛岡市教育委員会(1998)「繫遺跡 ―平成8年度発掘調査概報―」
 - ・盛岡市教育委員会(2003)「盛岡市内遺跡群―平成14年度発掘調査概報―落合遺跡」
 - ・盛岡市教育委員会(2008)「柿ノ木平遺跡・堰根遺跡―浅岸地区区画整理事業関連遺跡発掘調査報告書Ⅳ―」
 - ・盛岡市教育委員会(2008)「盛岡市遺跡地図 2008年版」盛岡市教育委員会
 - ・盛岡市教育委員会(2009)「川目A遺跡―国道106号線改良に伴う市道建設関連発掘調査報告書―」
 - ・盛岡市教育委員会(2013)「繫V遺跡―繫小学校校舎等増改築工事業に伴う発掘調査報告書―」
 - ・盛岡市教育委員会・瀧野常實(2018)「小山遺跡 ―介護福祉施設建設に伴う緊急発掘調査報告書―」
 - ・山形県教育委員会(1990)「川口遺跡発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財調査報告書151集
 - ・(財)山形県埋蔵文化財センター(2003)「かつば遺跡発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財センター調査報告書第114集

盛岡市遺跡の学び館所蔵考古資料図録Ⅱ

ー盛岡市川目 A 遺跡・沢田遺跡出土磨製石斧図集ー

2025 年 5 月 20 日

発行 盛岡市遺跡の学び館

〒020-0866 岩手県盛岡市本宮字荒屋 13 番地 1

電話 019-635-6600 F A X 019-635-6605

